

# 保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察（1）

## A Study on Significance of Simulated Childcare in Nursery Teacher Training (1)

猪田 裕子\* 久保木 亮子\*\* 塩津 恵理子\*\*\*

### 要旨

幼稚園教育課程及び保育士養成校の学生にとって実習は大きな課題である。そのため、演習科目として実習の事前指導を行うのであるが、それでも漠然とした不安を抱く学生は少なくない。そこで、より現場に即した具体的な学びの可能性を探るため「保育実習Ⅱ」の事前指導で模擬保育を導入した。この実践的な学びが、学生の抱える漠然とした不安を、どの様に解決可能な課題へと導き、それをどの様に実習に活かす事が出来たのかを考察する。併せて、学生自身の主体的な学びのさらなる可能性も探る。これにより、学生の主体的な学びから培われる保育実践力の育成の在り方を検討する。

キーワード：模擬保育 保育実践力 主体的な学び 実習課題

### はじめに

保育士養成校では「保育実践力の基礎」を自ら育む事の出来る学生を育成するため、講義や演習、実習といった様々な形式での授業が行われる。これにより、専門的知識や技能を身に付けていくのである。しかし、保育を行うと言う事は、単に子どもと関わる事のみではない。その業務は多岐に渡っており、様々な内容が複雑に絡み合っている。そのため、大学の4年間では、机上での学びと実習での学び、所謂、理論と実践の両面から織りなす経験を重視している。特に、実践的に学ぶ事の出来る保育実習は、学生にとっても大きな経験の場であり学びの場となっている。それ故、その事前指導として演習科目「保育実習指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」が設置されており、乳幼児の発達や援助、生活や遊び等、具体的な理解へと導きながら、保育者としての知識や実践的な技能を身に付けていくのである。

しかし、この事前指導を受講した学生であっても、実習直前まで「非常に不安である」との声は少なくない。既に「保育実習Ⅰ」を経て、これから「保育実習Ⅱ」を迎える学生であっても、それは同様であり、実習記録や指導計画の書き方、部分実習や責任実習に関する不安の声は特にそうである。中には何が不安であるかわからないと、漠然とした不安を抱く者もいる。学生によっては、保育所でのアルバイトやボランティア等で乳幼児との関わりを持つ者もいるが、やはり実習となると上記のような課題に不安を覚える姿が見られる。

そこで、「保育実習Ⅱ」に対する不安を出来る限り克服し、学生自ら主体的に学ぼうとする

---

\* 神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科 准教授

\*\* 神戸親和女子大学発達教育学部福祉臨床学科 教授

\*\*\* 神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科 教授

姿勢を育むために模擬保育を導入する事とした。これを通して学生は何を学び、どの様に課題を明確化していくのかを考察する。

## I. 実習に関する事前の指導とその課題

### i) 指定保育士養成施設における保育実習の目標

本学においては、保育士資格を取得するため「保育実習Ⅰ（4単位：保育所実習2単位・施設実習2単位）」を2年次に経験したうえで、「保育実習Ⅱ（2単位：保育所実習）」もしくは「保育実習Ⅲ（2単位：保育所を除く社会福祉関係諸法令の指定に基づき設置されている施設）」を3年次に履修する事が出来る。

「保育実習Ⅰ」及び「保育実習Ⅱ」における内容に関しては、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（平成27年3月31日 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知）の別添1「保育実習」で、それぞれの「目標」及び「内容」が明確に示されている。

「保育実習Ⅰ」における目標では「保育所、児童福祉施設等の役割や機能を具体的に理解する」、「観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深める」、「既習の教科の内容を踏まえ、子どもの保育及び保護者への支援について総合的に学ぶ」、「保育の計画、観察、記録及び自己評価等について具体的に理解する」、「保育士の業務内容や職業倫理について具体的に学ぶ」等、基本的で具体的な学びが中心となっている事が理解出来る。

「保育実習Ⅱ」では、「保育所の役割や機能について具体的な実践を通して理解を深める」、「子どもの観察や関わりの方角を明確にすることを通して保育の理解を深める」、「既習の教科や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び保護者支援について総合的に学ぶ」、「保育の計画、実践、観察、記録及び自己評価等について実際に取り組み、理解を深める」、「保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結び付けて理解する」、「保育士としての自己の課題を明確化する」（下線は筆者が引いたものである）等、その全ては「保育実習Ⅰ」を踏まえる事で、より実践的で明確な目標として挙げられている。さらに、「保育実習Ⅱ」の目標の最後に、「保育士としての自己の課題を明確化する」が加えられる事で、「保育実習Ⅰ」との弁別化が成された。

つまり、「保育実習Ⅰ」においては、保育所の機能や、そこで生活を営む乳幼児への理解、更には、保育士の職業倫理等について一通り学ぶ事が目標とされるが、「保育実習Ⅱ」では、それらを踏まえた上で、より具体的で実践的な内容及び理解が求められると言える。

### ii) これまでの事前指導とその課題

本学における保育士資格の取得可能な人数は、児童教育学科130名、福祉臨床学科40名、合計170名である。当該科目である「保育実習Ⅱ」では、これを複数の教員で担当し、学生同士で学び合う機会を取り入れながら細やかな指導を心掛けている。

事前指導の内容は、指導計画作成に関する事が中心となり進められる。学生が最も不安を抱く内容であるだけに、丁寧な指導が求められる。そこで、各人で作成した指導計画を確認する際、教員からの指導もあるが、周囲の学生同士で確認及び検討する機会も重視している。つまり、学生同士の協働性にも注目しているのである。何故なら、保育現場において保育者同士の

協働は保育の質に欠く事の出来ない要因であるからである。

しかし、学生同士の主体的な学びの姿を重視する一方で、その限界も見えてくる。実際の保育現場での経験も少ない中で取り組む指導計画作成は、一見すると、それは整然と書き綴られているように見えるが、そこに具体的なイメージを想起させる事は難しい。それ故、保育の流れや援助及び配慮事項にも具体性が欠けるのである。これは、学生自身も苦慮するところである。

そこで、より具体的な保育内容のイメージを想起させる事が出来るよう、実践的な学びとしての模擬保育を通して、理論と実践の融合的な学びの可能性を探る。

## II. 模擬保育の導入及び展開

### i) 模擬保育の目的

模擬保育を行う目的として、まず理論と実践の融合と言う視点が挙げられる事は上述した通りである。具体的な保育内容の考案、実習記録や指導計画の作成等、基礎的な学習は机上で行う事も可能であるが、そこに具体的なイメージが伴わなければ、より実践的な配慮の記述等は難しい。つまり、理論と実践との融合が保育実践力の育成には欠く事の出来ない要因なのである。更に、学生の主体的な学びの姿勢と意識の向上や、保育士養成における授業改善の手立てにも、模擬保育の導入は有意でると考える。

また、模擬保育を通して様々な保育の在り方を感じ取る事で、多角的視点を身に付けたり、他者の行う模擬保育を観察する事で見えてくる事実気づく事も出来る。これにより、これまで気づけなかった視点にも意識を傾ける事が可能となるのである。

この様な演習を取り入れている保育士養成校は多くあり、模擬保育に関する研究も様々な視座から行われている。例えば、上村（2013）は「模擬保育後に行う『ふりかえり』をその後の指導に有効に活かしていくことの重要性」<sup>(1)</sup>を、河北（2012）は「模擬保育の有効性、及び実践力の養成との関係について検証する」<sup>(2)</sup>事を目的とした。松井（2004）は「保育者としての配慮について学ぶことができるか」<sup>(3)</sup>と言う視点を目的として模擬保育を実施した。その他にも模擬保育を手掛かりとした研究は多くあるが、その殆どに保育者としての実践力や意識の育ち、授業の改善等が含まれている事は興味深いところである。

そこで本論における模擬保育の目的であるが、上記と同様、それは「保育実践力の基礎」の育成を目指すものであり、そこでの学生自身の主体的な学びの姿の成長を考察するものである。加えて、今後の授業改善の手立てへの探究も、その一つであると考えられる。

### ii) 模擬保育とPDCAサイクルの視点

2009年3月、厚生労働省より『保育所における自己評価ガイドライン』<sup>(4)</sup>が提示され、そこで「PDCAサイクル」の導入が強調された。この「PDCAサイクル」とは、もともとビジネスの世界から派生してきたものであり、本来は、事業活動における生産管理や品質管理などの管理業務を円滑に進める手法の一つである。しかし、それを保育現場における自己評価の理念モデルとして採用したのである。つまり、保育所保育指針を踏まえた保育課程の編成や、それに基づく指導計画の作成の際、「Plan（計画）」に基づき「Do（実践）」をし、その実践を「Check（評価）」する事で、「Action（改善）」へ結びつける事の重要性が示されたのである。そ

ここで、模擬保育を行うにあたり、学生の学びの姿を「PDCA サイクル」と対照させ考察する。

まず、模擬保育への取り組みは、各グループ内で先生役と子ども役とを決める所から始まる。ここでの保育内容は設定保育（部分実習）を想定し、指導計画を作成する。この指導計画作成は「Plan（計画）」に相当する内容である。

その後、子ども役の学生達は、その対象年齢や男女比率等を設定する。中には子ども一人一人の性格まで考えるグループもある。一方、先生役の学生も複数いるため、「複数担任制（チーム制）」における課題にも取り組む事となる。この様にして疑似クラスを構成し保育を行うのである。これは「Do（実践）」の部分であり、一度開始されると、終了まで途切れる事はなく、模擬保育といっても実践に近い姿であると言える。

模擬保育実施中、他のグループは周りでそれを観察しながら気づきや配慮事項、課題等を忌憚なくメモに残す。実施後は、全員で意見交換を行いながら、模擬保育の内容について討議を行う。これは「Check（評価）」に値すると考える。そして、最後に観察者が記入したメモを実施グループに渡し、振り返りの資料とする。そこから実践へのヒントや今後の課題等の検討を各自で行うのであるが、観察者の客観的視点からのメモ内容が「Action（改善）」に非常に役立つとの声もある。

この様に、「PDCA サイクル」において問われる保育者の専門性は、保育者の計画立案を起点とした保育実践であり、実習を直前に控える学生にとっては有意である。しかし、現段階で、子ども理解を起点とした保育の計画及び実践にまで至る事は難しいと考える。

### iii) 模擬保育の形態とその内容

2018年度、本学では126名の学生が「保育実習Ⅱ（保育所）」を履修しており、それを3名の教員で担当している。つまりチーム制の演習である。そこで、模擬保育を実施するにあたり、学生を42名ずつの3グループに分け、3名の教員がそれぞれ担当し、15回の内4回の演習を模擬保育に関する内容に充てた。

1回目の演習では、模擬保育グループを作るところから始まる。本演習では、毎授業の開始及び終了時、1グループ4人の学生で順番に手遊びの実践を行う。そこで、それを活用し全12グループを作り、その後、各グループで模擬保育内容の検討が行われる。保育内容が決定すると、各人で指導計画を作成する。

2回目の演習では、各人で作成した指導計画に基づき、保育内容に関する探究及び検討を重ねる事で、模擬保育グループとしての指導計画を作成する。その際、お互いの意見や捉え方、保育内容の進め方等、その類似点や相違点を踏まえて作成していくところに学びを感じる学生の姿も多くある。

3回目及び4回目の演習で、実際に模擬保育を行う。一人の教員が4グループを担当し、1日2グループの模擬保育実践を行う。1グループの中で先生役と子ども役とに分かれ、30分を目安に保育が行われる。その他の学生は周りで観察を行い、実践終了後は、そのまま討議に入る。実践する事で気づく事、観察する事で気づく事等、お互いに忌憚なく意見を交わした後は、次のグループの実践が始まる。これを繰り返して模擬保育実践は終了する。その後は、各人の振り返りを行い、自らの実習課題を明確にしていく。

### Ⅲ. 模擬保育の実際と課題

ここでは、各教員の下で行われた学生の模擬保育についての報告をする。模擬保育の様子や振り返り、学生同士の討論から導き出された課題、更には、それが実習に活かされたか否かに及ぶまでの記録である。

i) 模擬保育に参加した学生の実際と振り返り（事例①：集団ゲーム）

#### ① 模擬保育の様子

このグループでは4歳児クラスを対象にした指導案2つと5歳児クラスを対象とした指導案2つを作成していた。ここでは、5歳児の集団ゲームを考えた模擬保育を紹介する。

学生にとっては、5歳児の指導案を作成しようとする時、5歳児というと学生にとっては、保育をしていく中で子どもとの関わりや反応に手ごたえがあり、遊びの内容も考えやすく、発達の姿は比較的捉えやすいと言える。指導案に記載されている「子どもの姿」は、「じゃんけんのルールを理解し、遊びの中でじゃんけんを使って物事を決めようとする姿が見られる」としている。そして「友達とのつながりを広げ集団で活動することを楽しむ」を「ねらい」として設定している。

今回の模擬保育では「指導案」に記載されている活動に入る前からの子どもの行動の様子や、それに対する保育者の言葉かけなどの場面も示し、子ども役になった学生は、活動への参加に対する子どもの気持ちを想定しながら表現していた。また、先生役の学生は保育開始の集まりになかなか来ない子ども役の学生に対しての誘いかけの言葉や「じゃんけん列車」の遊びの説明やルールを知らせる時は言葉だけでなく、子どもの動きを確認しながら、参加したいという気持ちになれるよう具体的に伝えていた。遊びの中ではピアノの速度や音程を変えたり、じゃんけん列車の先頭になった子どもだけが複数回「じゃんけん」が出来るというのではなく、たくさんの子どもが「じゃんけん」の楽しさが味わえるよう途中で列の解散を行うなど、遊び方に変化を持たせるなどの工夫ができていた。

「じゃんけん列車」の遊びから次への活動へ移る際の先生役の言葉かけなどは、観察していた学生の参考になった点が多い模擬保育であった。

#### ② 模擬保育後の振り返り

学生の模擬保育を行うという取り組みの姿勢はどのグループも意欲的であり、指導案作成時の話し合いも熱心に行っていた。学生は先生役と子ども役になり模擬保育を行う事で初めて気づくことや見えてくることは数多くあったと答えている。

保育の流れの中で、活動と次の活動へのつなぎ目での子どもの動きを予測して言葉をかける必要があることなど指導案からは見えていないことへの配慮が出来ていなかったというのは、模擬保育を行ったから気づいた点であるとの反省点が挙げられた。また、保育者の言葉遣い、表情等保育者の雰囲気子どもたちに伝わり、クラス全体の様子や子どもたちの反応の仕方も変わるのではと保育者の影響力を改めて感じた学生もいた。子ども役になった学生からは保育者からの承認の言葉かけや注意の仕方を通し、子どもはどんな思いをするかなど子どもの気持ちに近づけたこと、子どもが楽しいと感じられるような活動内容の工夫、子ども目線で配慮する大切さを体験を通して認識できたとしている。

### ③ 実習後の振り返り

模擬保育の経験が実際に保育実習をする中で参考となり、実践力につながったかアンケート、また実習後の個人面談を通しての振り返りをみていくと、アンケートでは「授業内で行った模擬保育を実習で活かせましたか？」と問いに、このグループでは「YES」と答えた学生が42名中27名であった。「NO」と答えている中では模擬保育からは様々な発見や気づきはあったものの、対象児の違いや保育形態が異なっていたので、実習では直接活かせなかったと回答しているケースが多くみられた。そして今後4年次で行う幼稚園実習において今回の経験を活かしたいとしている。

中には模擬保育では先生役を経験することで、より実践力を身に付けることが出来たのではと感じている学生が多数いたが、今回1つのグループ内では模擬保育は4回実施だったため先生役ができたのは数名だけであった。学生の希望として先生役を学生全員が経験してこそ、模擬保育からの学びが学生一人一人の力として活かされるのではと望んでいることがわかった。学生の人数や時間的な面などの制約もあり、今後の検討課題の一つとしたい。

アンケートの自由記述では模擬保育を通して多くの気づきや感想が述べられている。実際に模擬保育を客観的に見る中で、自分では気づかない点や援助の仕方を知り、また身近な友達が模擬保育をしている姿を見て、自分も「頑張ろう」と良い刺激になったと述べている。

また、模擬保育をするという前提のもとでの指導案作成であったので、どのグループも活発に話し合う姿が見られ、十分な指導案作成の検討が行われた結果、学生同士、それぞれが他の学生の子どもへの理解、捉え方など保育観にも触れることもでき、指導案作成に対しても環境設定、援助の視点、記述の仕方等学びが深まったという感想が多くあった。

そして本番の実習において、保育を指導案に基づいて実施して分かったことは、子どもの反応やその時の状況によっては指導案通りには保育は進まないということを知り、その現実を受け止め、「臨機応変」に対応し「柔軟」に「余裕」をもって「自分自身が保育を楽しむ」ようにしたいと学生は記していた。

これらの感想や実習での学びは模擬保育を経験したからこそより深く実感出来、今後保育に向き合う時の参考にしてもらいたいと願う。

## ii) 模擬保育に参加した学生の実際と振り返り（事例②：製作活動等）

### ① 模擬保育の様子

ここでは、製作活動からリズム遊びに展開する模擬保育を紹介する。他のグループでは、5歳児を対象とした言葉を使う集団ゲーム、4歳児を対象としたボールを使用する集団ゲーム、3歳児を対象としたリズム遊び等の模擬保育も行われたが、あえて2歳児という年齢に着目し、その発達段階を踏まえての模擬保育展開を行った製作からリズム遊びへの保育を紹介する。

まず、指導案作成において重要な視点である子どもの姿では「朝の会で「やまのおんがくか」を歌う練習をしているため、普段からも歌う子どもが増えている。」と設定し、ねらいを「身近な材料を使って製作を楽しむ。音楽に合わせて身体を動かすことを楽しむ」とした。内容は「材料によって出る音の違いに気づき楽しむ」とし、ビーズ、クリップ、小さく切ったストロー等が準備された。

活動の展開は、ペットボトルに自分の選んだ材料を入れ、ふたをビニールテープで止めた後、シールを貼り飾り付けるといったものである。完成した子どもは先生に名前を書いてもらい、指定された場所でマラカスを鳴らして遊び、全員が完成した事を確認した後は「やまのおんがくか」に合わせてマラカスを使い音楽表現を楽しむという流れである。この時、保育者の援助に「子ども達が約束事を理解できるように、はっきり、ゆっくり、大きな声で話す」とあったが、その約束事の具体的な内容が明記されていないとの反省が観察をしている学生から上がった。そのため、指導教員より「細案」<sup>(5)</sup>の提案を行った

模擬保育終了後は、実際に保育を行ったグループと、それを観察していた他のグループとの討議が持たれ、それぞれの視点からの意見交換が行われた。

## ②模擬保育直後の振り返り

模擬保育終了後は、指導案作成に関する振り返りの声が多く上がった。これまで、指導案は一人で作成し、学生同士での確認はあったものの、最終は個人での作成に留まっていた。しかし、今回の模擬保育を計画する際、一旦は個人で作成するも、その後はグループで其々の指導案を持ち寄り、全員で一つの指導案を作る過程がとて学びになったとの事である。何故なら、他の学生の意見や自分にはない発想等の学びが反映された指導案作成の過程は、今後の実習に必ず活かされると学生自身が実感する事が出来たからである。一方で、副担任役との連携の難しさや、先生役や子ども役に徹する事の難しさ等に関する声も上がった。

観察者の立場からは、作成された指導案を見ながら観察する事で、立案の大切さが再確認出来た事、子どもに対しての声掛けから語彙力の豊かさの必要性に気づかされた事、客観的視点に立つ事で初めて確認する事が出来た視点等、多くの学びがあったとの声が上がった。

今回は、模擬保育の実践を通して育成される「学生の主体的学び」の考察が目的の一つであったが、実際に模擬保育を行う実践者（当該学生）ではなくても、それを観察する立場からも深い学びを得る事が出来たという事実は、今後の事前指導においても十分考慮されるべき内容であろう。

最後に、次の実習へ向けての課題として、事前準備の大切さや細やかな配慮の必要性、自らの指導案を客観的に観るといった視点や様々な可能性を予測する想像力及び柔軟性の大切さ等が挙げられた。これは、模擬保育での学びが、より具体的なイメージの想起を可能にしたと言えるであろう。

## ③実習後の振り返り

前述での模擬保育直後の振り返りにおいては、多くの学生がより具体的なイメージを持ち指導案作成にも取り組む事が出来たとの事であった。しかし、実際に実習を終えた学生にアンケートを取ったところ、42人中17名は授業内で行った模擬保育を実習に活かす事が出来たとの回答であったが、17名はそうではないと答えた。また、8名はそのどちらでもないとの回答であった。そこで、それぞれの学生の記述をまとめ下記に記す。

### 【模擬保育を実習に活かす事が出来た】

活かす事が出来たと回答した学生の多くは、模擬保育の経験を柔軟に取り入れ、自分の中で租借し、様々な場面で応用する事が出来ている内容が多い。

- ・ 模擬保育で行った指導案作りの経験が、保育者の援助や子どもの様子を想定する事に活かせる

た。また、書き方や活動の進め方、活動の内容など新たな発見にもつながった。

- ・事前の準備の大切さを意識して行う事が出来た。
- ・模擬保育を行った事で、保育に対する視野が広がった。
- ・臨機応変な対応が今後の課題であると明確に自覚する事が出来た。
- ・子どもの行動を実際に見て判断する事の大切さを学び、それを活かす事が出来た。
- ・保育の流れの中で、細やかな部分にまで意識を配る事が出来た。
- ・保育者の声のトーンや話し方、子どもの理解しやすい進め方など、実習で活かした。

#### 【模擬保育を実習に活かす事が出来なかった】

活かす事が出来なかったと回答した学生の多くは、模擬保育の実践内容と実際の実習内容とが直接的に比較されており、そのため活かされないとの回答になっている。しかし、指導案作成の経験は活かされたとの記述は多くある。

- ・模擬保育では子ども役だったので、あまり活かす事は出来なかった。
- ・担当が0歳児だったので、模擬保育の経験を活かす機会がなかった。
- ・模擬保育とは、年齢や内容、時間の長さも違ったため活かされなかった。
- ・設定保育を一度も行うことはなかった。
- ・模擬保育は全員学生だったが、実際には様々な個性の子ども達が多く難しい。

#### 【どちらでもない】

どちらでもないと回答した学生の多くは、活かす事が出来た部分とそうでない部分とが明確に記述されている。しかし、ここでも指導案作成の経験は活かされたとの記述が多い事は非常に興味深い。

- ・何回も模擬保育を行い、先生役と子ども役の両方を経験してみたかった。
- ・他のグループのアイディアは役に立ったが、部分実習を経験する事はなかった。
- ・保育のイメージを持って模擬保育に取り組む事は出来たが、保育園で実際に行う時、課題点が見えていなかった。

### iii) 模擬保育に参加した学生の実際と振り返り（事例③：身体表現等）

#### ①模擬保育の様子

ここでは、絵本の読み聞かせから動物の身体表現遊びに展開する模擬保育を紹介する。他のグループは、2歳児を対象とした輪投げ遊び、2歳児を対象とした新聞紙を使ってのボール遊び、1歳児を対象とした動物泣き声あて遊び等の模擬保育も行われたが、あえて2歳児という年齢に着目し、その発達段階を踏まえての模擬保育を行った絵本の読み聞かせから動物の身体表現遊びへの保育を紹介する。

学生は、1人で保育をするのが不安なのか、複数担任で2歳児の保育をする傾向があった。

先生役が2名、子ども役が8名、とても恵まれた環境である。2名の先生であれば16名の子どもを想定して保育をしなければならないが、8名の子どもの中に気になる行動をする子どもの対応に振り回され、全体の子どもの行動が把握できていない場面が多かった。20分程度の設定保育で動物の身体表現遊びを考えていて、導入に動物の絵本『くまさんくまさんなみてる』<sup>(6)</sup>の読み聞かせと話し合いをするなど考えていた。しかし、身体表現になると一人ひとり



の子どもの動物の表現の面白さや子どものつぶやきを見過ごし、指導案に立てている複数の動物の表現をすべてしなければという思いが強く、子どもたちの表現の喜びや楽しさを汲み取れず次々と進めていた。また、「ワンワン、ワンワン」と連発する子どもがいた。絵本には〔ワンワン（犬）〕は登場していなかった。先生は「ワンワン、ワンワン」という子どもの対応に困り、「ワンワン、いなかったよ」「今はワンワンじゃないよ」「ワンワン好きなの？」と繰り返すばかりだった。次に子どもたちが動物をイメージしやすくリズムに乗って楽しめるように音響（ピアノ演奏）を行っていたが、〔象〕を表現するときに童謡〔ぞうさん〕の曲を選んでいる。

## ②模擬保育の振り返り

模擬保育後のアンケート調査から、

- 保育指導案通りに保育を進めなければならない。
- 子どもの思いや発言、気になる行動をする子どもへの声掛けや対応に必死になり全体が見えなかった。
- 他学生と一緒に1つの指導案を作成することで様々な保育の視点があることに気付いた。
- 適切な環境構成、事前準備物の大切さ、場所、空間の取り方が必要である。
- 他のグループの模擬保育を見ることにより、子どもたちへの声掛けや声のトーンにより、先生の話を理解し集中して聞けることに気付いた。
- 保育中、子どもの動きがよく見れて観察できる適切な位置があることが分かった。
- 複数担任の連携が難しかった。
- 模擬保育をみんなに見られているので緊張した。

などの反省と気付き、学びがみられた。そして、これらの経験を本実習に活かしていきたいと考えている。

## ③実習後の振り返りと今後の課題

\* 模擬保育を経験したことが本実習で役立ったと感じている学生は、

- みんなの前で保育をしたことで緊張せず落ち着いて保育実習ができた。
- 気になる行動をする子どもを想定して模擬保育を行っていたので、子どもの行動を予測することができたので少し余裕を持って実習に望めた。
- 保育指導案をグループで立てていたので、部分指導案や全日案を立てるときは困らずスムーズに立てられた。

\* 模擬保育が本実習で役立たなかったと感じている学生は、

- 自分が行った模擬保育の子どもの年齢と本実習では年齢が違った。
- 表現遊びではなく制作や集団遊びなどをしてほしいと言われ、本実習での指導案と違った。
- 実習中に部分保育、全日保育をする機会がなかった。

模擬保育が大いに役立ったと感じている学生が多く、模擬保育の成果が見られる反面、本実習で役に立たなかったと答える学生もいたのに驚いた。

保育とは子どもの成長発達や興味関心、季節などを考慮して指導案を立案し、養成校での学びを基盤に経験を積み重ね総合的に展開していくことである。前述した①、②の振り返りから、学生に保育者としての専門的な学びや保育技術の習得と平行しながら、模擬保育を繰り返し経

験させていく必要性を感じた。以上の事柄から学生同士、保育を見つめる視点、多様な保育形態があっていいこと。そして保育はその時々状況、環境に合わせて応用し展開していく力をつけていくこと。「ワンワン、ワンワン」と連発する子どもに対して、どのように声掛けをしてよいのか困り果てず、その子どもの家で犬が飼われているのかもしれない。その犬を家族と散歩している楽しい経験があるのかもしれない。など、子どもの生活の背景や思いに寄り添い、読み聞かせの絵本の中に犬が登場していなくても子どもの思いを受け止め、子どもにとって身近な生活の中で知っている犬の表現をしてもよかったと思う。

また、〔ぞうさん〕の曲で〔象〕が表現しやすいのか？〔象〕と〔ぞうさん〕という言葉の一致だけで選曲してはいないのか。グループで表現遊びの選曲について様々な意見交換がされたのか。など、それらのことについても考えていきたい。

今回の模擬保育は未満児ばかりだったが、本実習で保育を行う際には模擬保育での経験を応用したり参考にしたりする力を身につけ、なぜ模擬保育を授業に取り入れたのかを学生一人一人が考えて欲しい。そして、様々な年齢の保育にも目を向け、3歳以上の保育、一人担任にもチャレンジし苦手意識を取り除いてほしい。各歳児の子どもの成長発達や興味関心などを知り、繰り返して遊ぶ楽しさや子どもの楽しんでいる様子や工夫しり考えたりしている姿を認められるようになってほしい。〈みんな違って、みんないい〉と、子どもたちがありのままの自分を様々な手段を使って表現できる環境を整え、保育者と子どもがその思いを共有し、園生活が楽しく居心地の良い場所を作ってほしい。そして、保育者自身（学生）も保育が楽しいと感じられるようになってほしい。

## おわりに

今回、導入した模擬保育では、その目的の一つであった「主体的な学びの姿勢」という視点に関しては、学生自身の振り返りからも有意であったと言える。特に、指導案作成の過程において、各人で作成した後、グループで話し合い、模擬保育へと臨んだ事は、その後の実習における立案にも多に活かされたようである。また、他者の模擬保育を観察する事で、保育における様々な視点に気付く事が出来たことも「主体的な学びの意欲」へと繋がったと言える。この様な振り返りを行う事が出来た学生は、模擬保育での経験を多角的視点から捉える事が出来ており、実践への柔軟な応用も可能であった。一方、模擬保育と実習での様子を一面的な視点のみで捉え比較した学生は、特に活かされる事はなかったと振り返った。これは、年齢や保育内容、人数等の設定が模擬保育時と違ったためであると言う。つまり、模擬保育での経験が実践の場で柔軟に応用される事は殆どなかったのである。しかし、この様に感じる学生が多いた事は事実である。

今回の模擬保育導入は、学生の主体的な学びの姿勢と意欲の向上、及び具体的な保育イメージの獲得等には非常に有意であった。しかし、これを実践の場で活かすために必要とされる柔軟な応用力や多様な対応性等、学生育成のための課題は多く残された。非常に可視化の難しい抽象的な課題ではあるが、模擬保育実践の検討を重ね「保育実習Ⅱ」における授業改善への手立てとして、今後も更に探究していく所存である。

## 注

- (1) 上村晶「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察(2)」『高田短期大学紀要』第31号, 2013年, 79頁.
- (2) 河北邦子「保育者養成における音楽表現指導実践力についての研究Ⅰー模擬保育の自己・他者評価調査を通してー」『山口学芸研究』第3号, 2012年, 55頁.
- (3) 松井寿美子「領域表現(造形)の授業方法に関する研究Ⅰー造形の模擬保育における問題点ー」『日本保育学会大会発表論文集』第57号, 2004年, 134-135頁.
- (4) 厚生労働省『保育所における自己評価ガイドライン』2009年.
- (5) 広岡義之編著『新しい保育・幼児教育方法』ミネルヴァ書房, 2013, 108-109頁.  
実際の保育を予想し、子どもの姿や保育者の援助、環境の在り方等を保育原案から更に具体的に細かく書き出していく。例えば、集団ゲームのルール説明の仕方、製作の進め方やその手順、予想される子どもへの対応等、より細かくその段取りを確認していくものである。
- (6) エリック・カール著『くまさんくまさんなにみてるの?』偕成社, 1984.  
鮮やかなタッチで動物の絵が描かれており、問答遊びを発展させながら読み進めていく。

## 参考文献

- 広岡義之編著『新しい保育・幼児教育方法』ミネルヴァ書房, 2013.  
厚生労働省『保育所保育指針』フレーベル館, 2017.  
厚生労働省『保育所における自己評価ガイドライン』2009年.  
汐見稔幸, 大豆田啓友編『最新保育講座②保育者論』ミネルヴァ書房, 2012.  
全国保育士養成協議会編『保育実習指導のミニマムスタンダード』北大路書房, 2007.